

普門山蟹満寺は綺田村にあり。真言宗にして、本尊は釈迦仏を安ず。〔紫銅の坐像長八尺なり〕当寺伝記に曰、む

かし此郷人常に至善にして仏につかふ事年あり、女一人をもちけり、幼少より普門品を誦して慈悲ふかく、一日田面に遊びけるが、村人蟹をとりて殺さんとしけるを買とり放ちやりけり。其父耕せんとて出けるが、蛇の蟄を吞てありけるを放たんとすれども放たざりければ。思はずも父のいふやうは、其蟄を放ちやらば我女を嫁して聳にとらんといひければ、蛇此ぬしが顔を見て、吞かけたる蟄を吐出し藪の中へぞ這入りぬ。父家に帰り悔しく思へども甲斐なし。其夜初更の頃、衣冠の人入来り、今朝の約束によりて参りしといふ。いよく浅間敷思ひて、何といふべきかたなく、今兩三日を経て来るべしといひければ、則帰りぬ。女此事を聞て一つの室をかたく閉て、普門品を誦して隠れ居たり。かの衣冠の人三日過て来たり。此度はもとの蛇の形となり、女の隠れたる室を這巡りて、尾を以て其戸をた、きけり。父母是を聞て大に恐る。夜半ばかりに至りて百千の蟹群り来り、此蛇を散々に挟斬て、蟹は行衛なくなりぬ。室内には通夜普門品を誦して他念なし。時に御長尺ばかりなる観音現じ給ひて、汝怖る、事なし、われ常に擁護せしと宣ふ。父母悦び蘇生の女に逢ふ如く、則土を穿ち蛇を埋て其地に寺を営み、冥福を薦、蟹満寺とぞ号しける。〔一名紙幡寺ともいふ〕